

岐路に立つ中国の行方

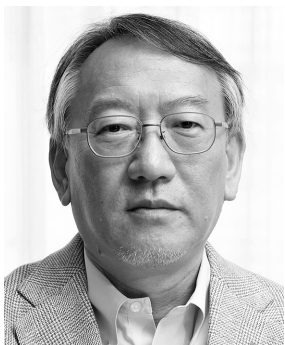
―問われる日本の対中戦略のあり方―

東京財団政策研究所主席研究員

柯

りゅう
隆

- * 毛沢東以降にみる中国政治の変化
- * 江沢民からUターンした自由化政策
- * 習近平体制の政策決定メカニズム
- * 大幅に崩れた需給バランス
- * 迫るスタグフレーションの可能性
- * 自動車にみる過剰生産問題
- * 無視できないコンテナ港の高い競争力
- * 日本企業の弱点は情報収集
- * 米中対立が日本経済の追い風に
- * 三中全会では人事に注目



山縣 それでは開会いたします。（拍手）

今日の講師をご紹介させていただきます。今日は柯隆先生をお迎えしました。柯隆先生は東京財団政策研究所主席研究員をなさっていらっしゃいます。南京市でお生まれになりまして、来日されたのは88年ということ、もうかなり長くなります。名古屋大学で修士号を取られまして、長銀総研、それから富士通総研を経て現在の仕事をなさっていらっしゃいます。

最近、文春新書で『中国不動産バブル』という新書を出されまして、これからほとんど新しい本を出していくご予定だということをお読みください。それでは先生、今日はよろしくお願いたします。（拍手）

毛沢東以降にみる中国政治の変化

柯 皆様こんにちは。久しぶりでございます。今日は早めに来て、隣の控室でおいしいお弁当をいただきました。そのときついでに去年の私の講演は何番になったのかと聞いたら（笑）、ちよつとショックを受けましてね。おいしいお弁当をおいしく食べられなかったんです。4番だったんです。1番を目指すんですけども、最低でも2番になるかと思ったら4番だと言われてどうなっているのかなと思って。これから皆さん投票するときちよつと気を付けてください（笑）。よろしくお願いたします。

さて、今日頂いた宿題が「岐路に立つ中国」ということでございます。1時間しかなくてあ